

静岡県身体障害者補助犬ユーザーの調査研究事業

報告書

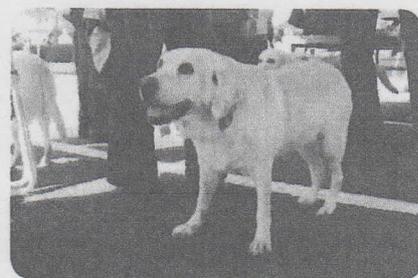
補助犬が街の風景に…
みんなと一緒に…



NPO法人 静岡県補助犬支援センター

本事業は、独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業です。

私は今も、とても幸せです。 —盲導犬リリィの一生—



(H20.9.27 リリィ)

みなさん、こんにちは!!

私の名前はリリィ。現在 13 才です。人間でいうと 80 才ぐらいかなあ。

私は 1995 年 6 月 21 日、ラブラドル・レトリバーの女の子として生まれました。

ところで、みなさんは盲導犬って知っていますか?

実は、私は盲導犬の卵として、この世に生まれました。話は 13 年前にさかのぼります。

私は盲導犬になる子犬を産む「繁殖奉仕」というボランティアをしている家で生まれました。私にはたくさんの兄弟がいました。みんなやんちゃで、毎日お母さんのお乳を取り合ったり、家の中を走り回ったり、お家の人を困らせていました。でも、そんな私たちにお家の人たちは温かく接してくれました。ここで私は、リリィという、ゆりの花を表すかわいらしい名前をつけてもらいました。

2ヶ月ほどすると、私は協会のスタッフの人に連れられて、小田原の M さんの家に行くことになりました。M さんの家は「飼育奉仕」というボランティアをしていました。「飼育奉仕」の家では、愛情いっぱい私たちを育て、人間との信頼を深めさせてくれます。私は、お庭を走り回って、お花のにおいをかいだり、草とじゃれたり、土を掘ったりすることが大好きでした。時々、夢中になって掘っていると、土管が出てきました。そんな時は、お父さんに叱られました。お父さんは、私が一人前の犬になるように、きちんとしつけをしてくれました。お庭では、せんとくかごをかぶったお姉ちゃんと、にらめっこをして遊んだりもしました。庭先にある門の扉が少し開いていることに気づいて、脱走して家族を困らせたこともありました。小田原では、よく海へ行きました。思う存分に泳いで遊べる海は最高でした。でも、海の水は、しょっぱくて、すぐのどが渴きました。こうして約一年間、毎日 M さんの家族から温かい声をかけられ、一緒に遊び、ひなたぼっこをしたり、昼寝をしたり、レンゲ畑を散歩したりして、たっぷりの愛情を注いでもらいました。おかげで、私は人間が大好きになりました。

1 才を過ぎ、たくましくなった私は、盲導犬になる訓練を受けるため、飼育奉仕の M さんの家を離れました。別れは、とても悲しかったです。みんな涙を流し私を見送ってくれました。一年間の思い出が走馬灯のようによみがえってきました。でも、悲しんでばかり入られません。これから私は、目の見えない人の目となる立派な盲導犬になるため、約 4 ヶ月以上の様々な訓練を受け、たくさんの言葉や動作を覚えなくてはならないのです。訓練は、まずハーネスを付けることから始まり、常に人間の左側

を歩くこと、段差がある所や階段の始めと終わりで、必ず立ち止まることを教えられました。「ゴー」「ステイ」など、英語での命令の言葉も30近く覚えなくてはなりませんでした。

それからみなさん、勘違いしないでください。私たち盲導犬の頭の中に地図があって、行き先を告げれば、そこへ自動的に誘導するわけではありません。私たち盲導犬は、主人の命令に従って動くのです。

でも、たとえ主人が「ゴー」という命令を出しても、危険だと判断した場合は動きません。

主人が「ゴー」と命令しても、車が来ていたら、進むわけにはいかないのです。

これを「りこうな不服従」といっています。人間と同じように盲導犬にも、すぐれた判断力が必要なのです。私たち盲導犬は、まさに、主人の命を預かっているのです。

また、主人が障害物にぶつからないように、主人の体の大きさを覚えておくことも重要です。そのための歩行訓練もたくさんします。

様々な訓練を終えて、やっと盲導犬の候補犬リリィの誕生です。

さあ、いよいよ社会へ出て、目の見えない人の目となって活躍です。

(私の主人はどんな人になるのかなあ?)

期待と不安が入り混じっていました。

1997年7月。訓練士さんが一人の女性の前に私を連れていきました。

(きっと、この人が私の主人になるのだわ)

「リリィ。」

彼女が私を呼びました。

私はうれしくなって、しっぽを振りました。

彼女は、にこにこ微笑んでいました。この女性が美幸さんでした。美幸さんは中途失明者で、この4月から浜松の盲学校へ通い始めていました。

二人っきりになった時、彼女は、私に盲導犬を持つと思った三つの理由を語ってくれました。

「一つ目はね、白い杖で歩いている時、時々人や物にぶつかってしまい、とても不安だったの。二つ目は、ちょっとした段差でも、ビックリするほど怖かったの。それから三つ目は、いつも家族に頼って、自由に行動できなかったの。」

彼女は、すでに盲導犬を持っていた友達から、色々なアドバイスを受けていたことも話してくれました。私は、

(ようし、美幸さんのためにがんばるぞ!) と思いを新たにしました。

さっそく、私たちは歩行訓練に入りました。最初は、ペースが合わず、思うように歩けませんでした。美幸さんが安心して歩けるように、美幸さんの気持ちになって、細心の注意を払いながら歩くように心がけました。一つ一つの失敗を克服しながら、私たちは、かけがえのないパートナーへと変わりつつありました。

そして、ついに8月8日、正式に美幸さんが私の主人になりました。

盲導犬リリイの誕生の日でもありました。

私は、毎日盲導犬として、一生懸命に仕事をしました。美幸さんはもちろん、美幸さんのご主人や息子さんたちからも、たくさんの愛情を注がれ、充実した日々を送ることができました。疲れて仕事から帰ってきても、家族みんなが私に声をかけてくれました。

(リリイがいて、ほんといやされるよなあ)

(私の方こそ、いやされていますよ!) 私も、美幸さんの家族に感謝しました。

美幸さんは、将来の仕事のため、カウンセラーや相談員の資格を取ろうと東京へも通いました。彼女の足元に座って、一定のリズムで新幹線に揺られていると、私もつい、うとうと寝てしまうことがありました。とても幸せなひと時でした。

でも、なんといっても一番の思い出は、海外旅行です。

生まれて初めて飛行機を見た時、その迫力、音の大きさに驚きました。そして、実際に乗ってみると、離陸と着陸の時の振動にビックリ!!新幹線とはぜんぜん違います。なぜ、こんな大きなものが空を飛ぶのかなあと思いました。

美幸さんとヨーロッパやアメリカに旅行しました。

旅の途中で、すばらしい景色をたくさん眺め、色々な国の人たちとお友達になることができました。8年間楽しく充実した毎日が続きました。

やがて、私は10才の誕生日を迎えました。その頃から、だんだん疲れやすくなってきていることに気づきました。私は、(まだまだ、美幸さんの役に立つようにがんばらなくっちゃ) と思いました。しかし、横浜駅の構内を歩いていた時、疲れてしまい、ついに立ち止まり座ってしまいました。美幸さんは、何かを察したようでした。

美幸さんとのお別れの日が近づいていました。

2005年11月、私は盲導犬としての8年半の仕事を終え、引退(リタイア)することになりました。

最後の仕事を終えると、美幸さんは私からハーネスを外しました。

「リリイ、長い間ありがとう。今まで本当にありがとう。」

美幸さんは、私を抱きしめて泣いていました。

私は、この言葉を聞いて、(自分の仕事は終わったんだ) と実感しました。

一頭の盲導犬が一生に仕えることのできる主人は、たった一人です。

仕事をやり終えた満足感と同時に、(これから私は、どうなるのかなあ) と思いました。

引退した後、私は不安になり、数日間、ゆるいうんちが出ていました。

私は、藤枝のYさんという家に引き取られることになりました。

Yさんのお父さんもお母さんも、私を見ると、頭をなでながら、やさしく言葉をかけてくれました。

「リリイ、あなたは今日から私たち家族の一員だよ!」

その言葉に、私はしっぽを高く上げ、左右に何回も振り、喜びを表しました。

そして次の日から、ゆるいうんちは、普通のうんちになりました。

一週間も経つと、昔から飼われている犬のようにリラックスしていました。

毎朝、私は 5:30 の目覚ましの音とともに起き、家族が起きてくるのをリビングで待っています。一緒に朝ごはんを食べると、大好きなお散歩です。近くの土手を 20 分ぐらい歩きます。散歩中お母さんは、「リリィちゃんはいいい子、いい子だね〜」と、私の歌を歌ってくれます。お家に帰ると二階で、まずはひと休みです。お父さんとお母さんはお隣の工場でお仕事です。お昼は、おやつをもらっています。お母さんは、時々私の大好きなさつまいもや、みかんや、メロンをくれます。お家の人たちは週 2 回、できあがった製品を町へ納品に行くので、私も車に乗って一緒に出かけています。

お家の人々が、いつもと違う服装をしていると、(あっ、今から、お出かけだ!) ということがわかるので、私もお出かけのしたくをします。

こうして Y さんの家にきてから 3 年が経ちました。

昔、盲導犬だったことがうそのようです。

お父さんは、

「盲導犬リリィではなく、甘えん坊リリィちゃんだね。」

と言っています。そんな時は、お父さんの顔を見て、にこにこ微笑み返しています。

先日、家の近くで、自衛隊の航空祭がありました。連帯を組んだ自衛隊の飛行機が上空を横切りました。すごく大きな音でした。

(あれっ、この音、どこかで聞いたことが……)

私は、目を閉じて過去の記憶をたどりました。

すると、飛行機に乗って行ったスイスのアルプスの景色、オランダで見た美しいチューリップ畑、フランスのエッフェル塔が目に見えなくなりました。

そう、美幸さんとの楽しかった海外旅行のことを思い出したのです。

私は興奮して、いてもたってもいられず、家を飛び出しました。

帰宅して、私がいないうちに気づいたお父さん、お母さんは大あわてでした。

近所を捜しても私は見つかりません。ついに警察に電話をかけました。

すると、一匹のラブラドルが交番で保護され、本署に輸送されていることがわかりました。それは私です。私は、パトカーに乗って、無事に家に帰ってきました。お父さんも、お母さんもほっとしたようで、何度も何度も私の頭をなでてくれました。

今年のお正月は、お父さんとお母さんが海へ連れて行ってくださいました。海を見た瞬間、私の気持ちは高ぶりました。

「ワン、ワン、ワーン！」

吠えながら海へ飛び込みました。小田原の海を思い出したのです。飼育奉仕の時、M さんの家族と一緒に遊んだ小田原の海を思い出したのです。

お父さんもお母さんもびっくりしていました。

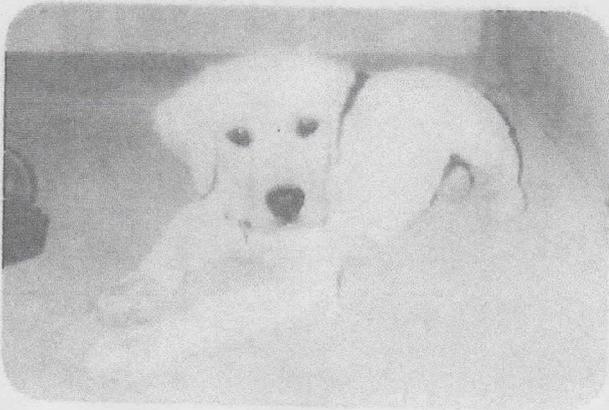
たとえ甘えん坊リリイになっても、幼い時に、かわいがってもらったMさん家族との生活、そして盲導犬リリイとして、懸命に精一杯働いた時のことを忘れることはありません。しっかりと覚えています。

私の記憶の中には、お世話になった心優しいたくさんの方の姿があります。そして今も、お父さんやお母さん、近所の人たちから、たくさんの愛情をもらって生活しています。

私は今も、とても幸せです。

このお話は事実に基づいたフィクションです

(文・岡部 芳明)



リリイ2ヶ月



貴重な体験

この半年間、私はたいへん貴重な体験をさせていただきました。2007年の3月に、久保田さんからNPO法人静岡県補助犬支援センター設立の話を知り、取材のお手伝いをさせていただくことになりました。今回、補助犬使用者の方と一緒に県内の補助犬ユーザーの方々とお会いし、貴重なお話を聞かせていただきました。取材を進めていく中で、お一人おひとりにはかけがえのない、大切な人生、語りつくせない人生があることを実感しました。お話を聞きながら、時には泣き、時には笑うこともありました。そして、補助犬との出会いによって人生が大きく変わったことを知りました。拙い取材でしたが、取材に快く応じてくださった皆様、誠にありがとうございました。

また、「盲導犬リリイの一生」という物語を作るために、久保田さんや、引退したリリイと暮らしているYさんからも色々なお話を聞かせていただき、実際にリリイに会い、触れ合うことができました。物語に描いたとおり、リリイは、とても穏やかな犬で、幸せな顔をしていました。

浜松へ行った時には、日本の盲導犬第一号チャンピイのご主人であった河相冽さんに取材することができました。河相さんは、とても温かな方で、話される言葉、ひと言ひと言に重みを感じました。奥様も素敵な方で、色々なお話を聞かせていただきました。

この取材を通して、私は、人生を精一杯、懸命に生きているたくさんのすばらしい方々に出会うことができました。この冊子を通して、体の不自由な人たちには補助犬のすばらしさを、健常者には補助犬へのさらなる理解を深めていただけたらうれしく思います。

私も、多くの子どもたちに、どんな状況でもあきらめず、自分の人生を精一杯生きることの大切さを伝えていきたいと思います。

。 岡部 芳明